『グローカル天理』第６号（通巻 18 号）掲載論文要旨

井上昭夫　巻頭言　「新・「国際参加」プロジェクトの意義―インド西部地震被災地救援活動について―」

本年１月 26 日、インド西部グジャラート地方において発生した大地震により、9000 の村が崩壊し、死者は数十万人を越えたと推測されている。世界各国の政府や NGO は、いち早く救援活動を開始したが、いまも被災地では住居が決定的に不足していると国連は伝え、救済の継続をよびかけている。この機に、おやさと研究所で は本プロジェクトを策定し、現在、国連ユニタールや UNDP（国連開発計画）などとの協働体勢を創りあげている。「教学協働」の大学改革方針に基づいて、 私学の宗教的精神によって開発された、本学独自の献身的「国際参加」をめざす。

金子昭　特別寄稿　「天理大学改革への緊急提言―天理人間学に基づく基礎教養とは何か」

「天理大学の運営審議会は、今年一月、本学の教養教育は天理教学と接点を持つべきと主張する「答申」を理事会に提出した。私の「緊急提言」では、その内容を受けて、天理人間学 Tenri Human Studies にもとづく基礎教育について学問論的に論じ、他者への献身と自己完成を統合させることをめざす教養教育を提言する。」

荒川善廣　「「元の理」の探究（３）　魂について［2］」

魂を、そこで心身現象が生起する場所（locus） としてとらえることにより、「月日のやしろ」と呼ばれる教祖の立場がより千名になる。従来、「やしろ」とは、教祖の人間身体を指すと考えられてきた。だ が、この説に固執すると、教祖が身をかくされた時点で、「月日のやしろ」という立場そのものが成り立たなくなる。むしろ身体は「やしろの扉」に相当するも ので、「やしろ」に該当するのは、端的に言って、教祖の魂である。そして、魂は存命であるから、いまなお教祖は「月日のやしろ」として、人間の成人を守護 されているのである。

北詰洋一　「紛争回避のテクノロジー（３）　少子化、人口爆発、「水は只」の関係」

今回は少子化の問題から人口問題を取り上げました。日本では少子化を国内問題として深刻に考えているが、グローバルに考えると人口爆発という全く別の逆の 問題になり、食糧を勘案

すると多すぎる人の数をどう抑えるかが重大だ。しかも農産物の増産に力を入れすぎたあまり、地下水を中心に水不足が生じています。 人口という問題一つも一分野、あるいは一国家のことと考える危険性を教えてくれる。

末延岑生　「ことばと教育（３）　ことばの元を探る［３］」

J. G. Helder は、言語を創り出す人間の力を「内省（reflection）」と呼び、人間は思考することによって内省意識が増し、他の動物には見られない独自の言語を形成するという。O. Jespersen によると、言語の起源はむしろ混沌から始まり、洗練の方向へとすすみ、単純へ落ち着くといっている。単語は非常に長く、文法は複雑、気 まぐれで、言語は系統的なものではなく、まるでジャングルの蔦のように互いのことばが絡まっており、それが時代と共に洗練されて簡素化されていったのでは ないだろうかという。ことばの進化説に続いて、人間の長い歴史の中で、ことばの不思議は、自然と人々に神授説を抱かせるものがあったことは事実である。それを紐解くためには、まず、『聖書』の存在を無視することはできない。

宮田　元　「宗教・スポーツ・教育（３）　宗教とスポーツ［１］」

人間は、身体と精神、体と心から成り立っている。修行は、人間の体を鍛えることによって、心を鍛えようとする狙いをもつ。修行の条件として、理想目的、指 導者、環境的条件、方法の工夫があげられる。修行の具体的方法として、たとえば、歩くという行動設定の中で、比叡山の回峰行を取り上げたが、精神を集中し て、同じ簡単な行動の型を繰り返し継続していくとき、心が鍛えられ、新しい心の境地が開かれてくる。現代においては、スポーツも、毎日の練習を通して、人 間をつくる役割を果たしていると思われる。

堀内みどり　「天理異文化伝道（17）　天理教のコンゴ伝道［16］初代会長時代〈1963-1967〉［10］」

高井は、コンゴ布教の経験から海外への伝道で求められることを以下のようにまとめている。言葉を習得すること、伝道地の風俗習慣など物の考え方や受けとめ 方を学ぶこと、つとめとさづけを信じきって日々を送ること、魅力ある教会にすること、信頼関係を構築すること、布教者は常に求道者であること。

佐藤浩司「天理教東南アジア伝道誌（10）　戦前のフィリピン伝道［８］」

フィリピッン教会初代会長、本宮寛の所属する本島支教会（現大教会）は、海外伝道が盛んである。これは、後に本島の二代会長となった片山好造によるもので ある。彼は、地図上にコンパスで円を描き、線上に布教師を派遣し、次第に円を拡大するという「ぶんまわし（コンパス）布教」と、布教師を外国航路の大きな 船に船員として乗り込ませるという「船舶布教」を実践した。この片山の構想を実行したのが津野兼盛であり、そして彼の導きで入信したのが本宮寛であった。

佐藤孝則　「生命論としてのエコロジー　（５）　「遺伝子治療」の光と陰　［１］」

「遺伝子治療は究極の医療」と言われている。今年５月 18 日、ワシントン・ポスト紙は米国の実験的不妊治療で 17 人中２人の胎児に染色体異常が生じていたと報じた。この治療を実施した聖バーナバス医療センターの 研究者は、英国の専門誌に生まれた子どもはみな健康だと報告し、２例の染色体異常（ターナー症候群）の胎児については全く記さなかった。むしろ、彼らは２ 人が流産と人工中絶によって出生には至らなかったことを、記すべきであった。私は、そうするがこの実験的不妊治療を許された研究者に対する責務であると思 う。

小滝　透「天理比較神秘論への試み（18）　イスラーム神秘主義―その（３）」

今回は、イスラーム神秘主義が社会的に自らを組織し教団活動を繰り広げてきた軌跡を見てきた。そ れは、十二世紀から開始され、中世イスラーム世界において最盛期を迎え、その後自己変革を遂げながらネオ・スーフィズムとなって結実した。伝統イスラーム 勢力で唯一西欧列強に立ち向かったのは実に彼らであったのだ。現在、彼らの活動は目立ったものとはなっていないが、中東に見る宗教アイデンティティーの強 さから見てもいずれ近い将来に再び台頭の兆しを見せるものと思われる。

小林正佳　「芸術・癒し・宗教（18）　感情の象り」

ギリヤーク尼ケ崎さんの体験のことを書いた。かれ自身にとってさえ突発的であったそこでの行為は、しかし、生涯かけて踊って来たそれまでの営みの延長線上に生まれて来たものだし、その後の公演の場での踊りもまた、はっきりそこでの体験を映し出している。意 図的な振り付けを離れてなおからだが動き出すためには、感情の噴出を一つの表現に導く回路があらかじめ用意されていなければならない。どうやらわたらした ちは、訓練によって身につけた動き以外の動きを、なかなか動くことができないらしい。からだ自体さまざまな動きの可能性をもって

いるにしても、可能性はあ くまで可能性で、しかも、実現されない可能性は次第に閉ざされてくるだろう。

金子珠理　「ジェンダー女性学情報（17）　社会福祉とジェンダー［２］

ジェンダー・エシックスの具体例として、札幌母親餓死事件を取り扱う。福祉事務所に生活保護申請に来た女性が結局は「相談」で処理されてしまった経緯をみながら、その背景にある「特別の倫理」を探る。

上杉武夫　「都市の再生に向けて―アメリカ通信（16）　再生そして蘇生へ」

カリフォルニアでは、急激な物価高によって、電力や水道やガソリンの不足が心配されている。そして、多くの州民がこれまでの化石燃料の過 剰な使用のために、環境悪化が引き起こされており、サステイナブルで循環型のライフスタイルに回帰すべき時が来ている事に気付いている。ブッシュ政権とカ リフォルニアの対立はアメリカにおけるエネルギー問題のシンボルとなっているようだが、問題解決のために選択の余地はほとんどない。アラスカの鯨取りは鯨 を仕留めた後、その霊をなぐさめ再びその鯨が海に戻って来てくれるように祈るが、我々もそのように自然を敬い自然に感謝すべきだ。それがカリフォルニアの エネルギー問題解決の第一歩だ。

特別連載・シンポジウム「天理スポーツを語る」（６）
パネルディスカッション『天理柔道とオリンピック』［２］

前号に続き、シンポジウム「天理スポーツを語る」の午後の部にて行われたパネルディスカッション『天理柔道とオリンピック』の内容を掲載する。本企画は、シドニーオリンピック柔道競技 60kg 級金メダリストの野村忠宏氏（ミキハウス）、同コーチの細川伸二氏（天理大学助教授）、同 100kg 超級銀メダリストの篠原信一氏（当時、旭化成・天理大 学非常勤講師，現在、天理大学講師）、そして篠原選手を大学時代より指導されている正木嘉美氏（天理大学助教授）の天理大学出身の柔道家４名をパネリスト として招き、同じく天理大学出身の柔道家であり、同オリンピック国際審判員である藤猪省太氏（本学教授）の司会のもとに進められた。